今、そこにある意味

～ある被爆建物をめぐって

大牟田　聡

「にんげんをかえせ」という言葉で原爆の非人道性を鋭く衝いた詩人、峠三吉[i]。彼は爆心地から三キロ離れた自宅で閃光を浴びた。

彼は一九四五年八月六日の広島について、次のような「メモ～覚え書～感想」を残している。

「八・六、午前八時十分敵三又は四機わが広島に新型爆弾を投下、広範囲に及ぶ爆風と共に、光線に近き熱波を伴ふ。（原子爆弾）

郊外に近き町を余したる全市家屋倒壊、屋内に居たるものは下敷となり発したる火によって焼死、戸外にありたる者は殆んど火傷を受け多くの者死す。」

こう書き始めた峠三吉は、その後訪れた、広島市街の中南部に位置する陸軍の被服支廠

について克明に記している。

「被服本廠負傷者収容所、附近の田畑、熱火にて葉をちりちりに巻く。
建物外観コンクリート巨大な倉庫二階建、小さき窓、鉄格子鉄扉皆歪む。
門前不安な人つめかく、二、三日して収容者氏名（不明のもの――附中二年生等アリ――）
貼り出さる。

×

広き構内白日下に散乱する倒壊も木造一棟、人、擔架右往左往。
被服廠神社の前にて敬礼する者、擔送者の顔の上に置く蓮の葉。」

この陸軍被服支廠で峠が見た惨状は「倉庫の記録」と題した散文詩の形で、一九五一年に自費出版された『原爆詩集』に収められている。八月六日当日に関する記述を抜粋する。

その日
いちめん蓮の葉が馬蹄型に焼けた蓮畑の中の、そこは陸軍被服廠倉庫の二階、高い格子窓だけのうす暗いコンクリートの床。そのうえに軍用毛布を一枚敷いて、逃げて来たものたちが向きむきに横はっている。みんなかろうじてズロースやもんぺの切れはしを腰にまとった裸体。

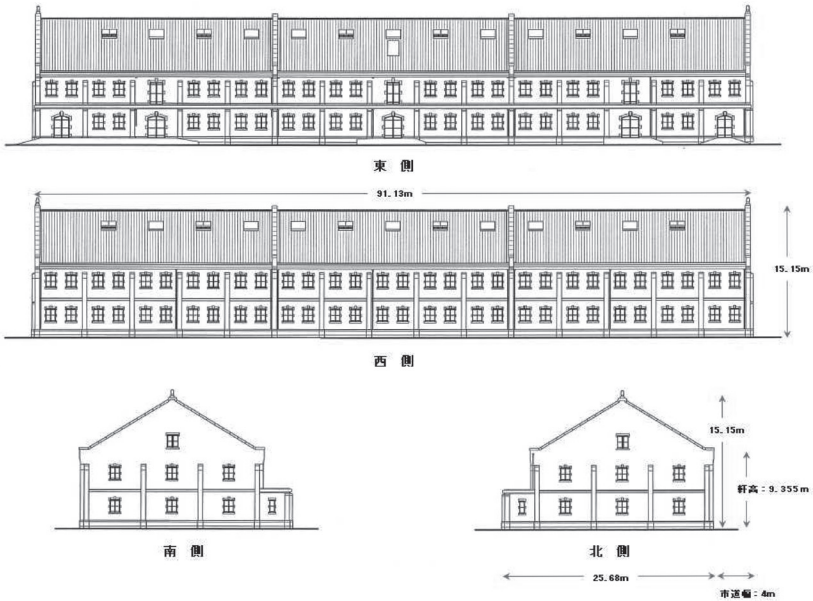
足のふみ場もなくころがっているのはおおかた疎開家屋の跡片付に出ていた女学校の下級生だが、顔から全身へかけての火傷や、赤チン、凝血、油薬、繃帯などのために汚穢な変貌をしてもの乞の老婆の群のよう。
壁ぎわや太い柱の陰に桶や馬穴が汚物をいっぱい溜め、そこらに糞便をながし、骨をさす異臭のなか
「助けて　おとうちゃん　たすけて
「水、みづだわ！　ああうれしいうれしいわ
「五十銭！　これが五十銭！
「のけて　足のとこの　死んだの　のけて……
声はたかくほそくとめどもなく、すでに頭を犯されたものもあってなかばはもう動かぬ屍体だがとりのける人手もない。ときおり娘をさがす親が厳重な防空服装で入って来て、似た顔だちやもんぺの縞目をおろおろとのぞいて廻る。それを知ると少女たちの声はひとしきり必死に水と助けを求める。
「おぢさんミヅ！　ミヅをくんできて！」
髪のない、片目がひきつり全身むくみかけてきたむすめが柱のかげから半身を起し、へしゃげた水筒をさしあげふってみせ、いつまでもあきらめずにくり返していたが、

やけどに水はいけないときかされているおとなは決してそれにとりあはなかったので、多くの少女は叫びつかれうらめしげに声をおとしその子もやがて柱のかげに崩折れる。
灯のない倉庫は遠く燃えつづけるまちのひびきを地につたわせ、衰えては高まる狂声をこめて夜の闇にのまれてゆく。
（「倉庫の記録」より[ii]）

旧広島陸軍被服支廠（広島市南区）

「灯のない倉庫」として、数多くの死を呑み込んだ陸軍被服支廠は、七五年経った今も残る数少ない被爆建物のひとつだ。

広島市南区出汐町に四棟が残る「旧陸軍被服支廠」は、一九〇五（明治三八）年に陸軍被服廠広島出張所として設けられ、二年後に支廠となった。「廠」とは、もともと内部に仕切りのない建物を意味し、そこから工場を指すようになった言葉だ。被服本廠は東京の赤羽台に、支廠は大阪、広島などにおかれた。広島には被服支廠のほか、糧秣支廠、兵器支廠もおかれ、いわゆる「陸軍三廠」が揃っ



旧広島陸軍被服支廠の全体図（広島県 HP より）

ていたことになる。
被服支廠は十三棟あったが、現存しているのは四棟。鉄筋コンクリート造り、煉瓦貼りで、高さ十五メートル余りの三階建て、長辺が九一～一〇五メートルあり、いずれも延べ面積が五千平方メートル前後ある巨大な建物だ（数値は広島県調べ）。
記録によると一九一三（大正二）年に建てられ、軍帽、軍靴、ベルト、ボタン、肌着といった陸軍関係の衣料に留まらず、毛布や背嚢、飯盒や水筒といった身の回りの品々を製造、修理、保管していた。最盛期には約二千人が働き、戦争末期には徴用工や学徒らも大勢動員されてい

旧広島陸軍被服支廠（広島県 HP より）

たという。

ヒロシマを描き続けた画家として再評価されている四國五郎（一九二四〜二〇一四）も一九四二年から三年間ここで働いた。

原爆による爆風でも崩れなかった支廠は、直後は救護所として使われた。

戦後は県立工業高校の校舎、民間物流会社の倉庫などとして半世紀にわたって活用された。ちなみに私が広島で学生生活を送っていた頃、国が所有する一棟の一部は「薫風寮」という名の学生寮として活用されていた（大学移転に伴い一九九五年閉鎖）。

かつては広大な敷地のなかにあった被服支廠だが、戦後、周辺の住宅開発が進められ、道路ひとつ隔てたところに一般の住宅が密集して建っている。

大正から昭和、平成から令和へと時代を経てきたこの建物を再利用しようという動きは、これまで何度もあった。

四棟の建物のうち、三棟は広島県が、一棟は国が所有しているが、一九九五年前後には「瀬戸内海文化博物館」構想がかなり具体的に検討された。関係者[iii]によると、三棟を歴史博物館、技術史博物館、水族館にそれぞれ割り当て、残り一棟は、パフォーミングアーツ系のアートセンターとする構想だったという。しかし、外部のシンクタンクからの提案に、地元で検討を重ねてきた有識者が強く反発した上に、県議会の有力議員が「（構想について）おれは聞いていないぞ」とへそを曲げたという。さらに現状の建物を活かす前提だと予想以上の費用が見込まれたことから、残念ながらこの構想は頓挫した。

一九九九年頃からはロシアのエルミタージュ美術館の分館を誘致しようという検討が始まった。だが、広島とエルミタージュ美術館との間に接点が特段あるわけではない。集客も見込めず持続的な運営が困難だという理由で誘致は見送られた。至極当然の帰結だった。

結局再活用について何の進展もないまま、被服支廠は放置され続けた。

そうしたなか、二〇一九年十二月、広島県は所有する三棟のうち、一棟のみ外観を残し、二棟を解体する方針を明らかにしたのだ。

その最も大きな理由は二〇一七年に行った耐震性の調査だった。「震度6強の地震で倒壊または崩壊する危険性が高い」というのだ。しかも試算では耐震性を高める改修には数十億円かかるという。

旧広島陸軍被服支廠（広島県 HP より）

広島県の原案によると、外観を保存する一棟は、大きな地震が発生しても近くの住宅に被害が出ないよう外壁を補強、屋根なども改修する。残り二棟は解体するが、「VR」（バーチャルリアリティ＝仮想現実）技術を用いて、内部の状況をデジタル映像として保存するというものだ（国所有の一棟については触れていないが、早晩県の解体方針に歩調を合わせることが予想される）。

実は、広島県は解体方針を打ち出す一年前には、一旦は被服支廠を残す方向で改修案をまとめていたのだという。ところが、県議会最大会派の自民党から将来の財政負担を懸念する声が出たため、方針を転換したのだそうだ。

広島に残った数少ない被爆建物を、「予算がないから」と解体に踏み切ろうとする行政に対し、保存を望む声は決して少なくない。しかも、これまで建物を活かそうという積極的な動きをほとんどして来なかったのは行政の怠慢だともいえる。平和行政を高らかに謳

いながら、具体的な被爆建物の保存等には手をこまぬく。それは戦後の広島をずっと貫いてきたある種のジレンマでもある。

広島の内部で生活していると、「今、そこにある意味」に対してきわめて鈍感になってしまう。外部から見れば、「ヒロシマ」にある「被爆建物」が「そのままの形で現存している」という事実こそが重要なのだが、多くの市民にとって「被爆地であること」はあまりにローカルな日常であり、えてして無関心に陥ってしまう傾向にあるように思える。

これまでも数多くの被爆建物が人知れず解体され、姿を消してきた。私有であればそれも致し方ないところがある。だが、公共財産として、巨大な被服支廠が被爆七五年を経て残っている意味は、広島を離れ、世界的な俯瞰で考える必要があるのではないか。

まず、この建物そのものの価値だ。

一九一三年に完成した建物は、鉄筋コンクリートが使用された国内でも最古級の建物だが、特筆すべきは鉄筋コンクリートと煉瓦を併用している点だという。煉瓦貼りは共通するが、当時兵器支廠は木、糧秣支廠は鉄を併用していたということで、鉄筋コンクリートを用いたケースはきわめて珍しいのだそうだ。

ただそれであれば一棟残せばそれでいいではないかという考え方も成立する。

だが、この巨大な建物が「群」として存在する「場」にこそ、この被服支廠の価値があ

錆びついた鉄扉

る、という考え方に私は賛同する。

戦前、この巨大建物群は軍需工場であり、大勢の人が働き、そこには学徒や女子挺身隊、徴用工もいた。そして原爆投下直後には被爆者を収容する救護所となり、大勢の人がここで命を落とした。歪んだ鉄扉を前にすると、そうした歴史を踏まえた無言の訴えが胸を貫く。

巨大な建物の威圧感と沈黙が、迫って来る。

それこそが「今、そこにある意味」ではないのか。

アウシュヴィッツの強制収容所は、今もそのまま保存されているからこそ、ユダヤ人虐殺の事実を私たちに突きつけてくる。同じように、被爆した巨大建物群は、峠三吉の詩とともにヒロシマの被爆直後の実相と、被爆「前」の史実を私たちに突きつけてくる。

逆にいえば、広島を語る「場」のひとつとして、この巨大建物群を利用しない手はない、と考える。これまで市民からもいろいろなアイディアが提案されてきた経緯を考えると、それらをまともに取り上げず、無策のまま「解体」という安易な方向性を打ち出した

行政サイドの罪が大きいのは確かだ。しかしながら一方で、被服支廠の利活用をめぐって多くの市民が無関心を決め込んできたことも否定できない。耐震費用を含め、どのように考えれば負債にならない有意義な形で将来に残せるかを真剣に考える必要がある。

広島の戦後復興を描いたノンフィクション『平和の栖（すみか）広島から続く道の先に』等で知られる作家の弓狩匡純（ゆがりまさずみ）[iv]は、ＳＮＳ上の論評として「新たな発想で被服支廠の存在意義に付加価値を加えなければ進展は望めない。結局のところ誰も、本気で被服支廠の保全を考えてはいないのでは？[v]」と敢えて厳しい言葉を投げかけている。「戦前から戦後にかけての歴史的遺産であり残すべきだ」という理念は誰も否定しない。しかし、今のまま残しても、改修費用は捻出できないし、ましてや収入が見込める施設にはならない――そこまで考えなくては意味がない、というのだ。

そこには、広島市が今後どのような都市を目指すのかという根本的な問題も関わっている。

広島市への観光客は、原爆ドームの世界遺産登録が決まった翌年の一九九七年に初めて一千万人を突破し、二〇一八年には一三三六万人が訪れている。とりわけ外国人の数は二〇一五年に初めて百万人を超え、二〇一八年は一七八万人に達している。

もちろんそれは観光地としての魅力が前提にあるが、その核心にあるのは「人類初の原爆が投下された都市」にこそある。そのことは平和都市を標榜する広島市にとっても認識

されているはずだ。しかし、原爆ドームを中心とした広島平和記念公園周辺の整備には力を入れてきたものの、そのエリア外にある被爆建物の保全にはこれまで必ずしも積極的とはいえなかった。確かに被服支廠があるのは、原爆ドームのある場所から二・七キロ離れていて、立地条件がいいとはいえない。そのため、市民であっても訪ねたことがないという人は少なくない。

弓狩はそうした不利な立地を活かすために、平和公園から被服支廠、そして宇品港から瀬戸内の魅力的な島々へとつなぐルートを開拓すれば、欧米からの観光客を惹きつけるエコ・ツーリズムにもつながると提案する。とりあえず忘れられた被爆建物をひとりでも多くの人に体感してもらうには、ピンポイントでの保全を考えるだけではなく、被服支廠を含む「線」「面」として戦略を立てることが必要だ。その意味で彼の主張は傾聴に値する。

さらに被服支廠の巨大な建物そのものをどう再生するかも大きな課題だ。アートスペースや劇場として活用できないか、あるいは国連機関を招致するのはどうかといったいろいろな声が上がっているが、ここでも立地の問題を考慮に入れる必要がある。

なかなか簡単に答えが出る問題ではなさそうだが、まず「被爆地・国際平和都市としての理念」、そして「活用にあたっての環境整備」といったところをしっかり踏まえた上で、将来に向けた計画を立てる必要があるのではないか。

ただ今回、広島県が解体の方針を明らかにしたことで、若者を中心に「旧広島陸軍被服支廠倉庫の保存・活用キャンペーン」が立ち上がり、わずか二週間で被服支廠の保存を求める一万二千筆の署名を集めたことは特筆に値する。また、県が募集した「パブリック・コメント」も二千二百通を超え、これはこの種のパブコメとしては異例の多さだという。

これらの動きを受けて広島県は「二〇二〇年度の解体着手を見送る方針を固めた」と報じられている[vi]。ただ、そうであったとしても現段階では解体までの猶予期間が設けられたに過ぎない。

被服支廠が存続するかどうかは予断を許さない。だが、市民を巻き込んで議論を深めるきっかけになったことも確かだ。「国際平和都市」として、解体すべきか保存すべきかを考えれば答えは自明だ。だとすれば必要なのは、国際平和都市のなかでの位置づけだけでなく、観光客や市民に対していかにアピールしていくのか、どう新たな価値を付与するかだ。

そこまで議論を深めれば、被服支廠に限らず、今後の国際平和都市のありようも見えてくるのではないだろうか。

峠三吉の散文詩「倉庫の記録」は八月六日を「その日」とし、「二日め」「三日め」と続く。被服支廠の内部に溢れていた女子学生や若い工員らの呻きは次第に薄れ、聴こえなく

なっていく。そして「倉庫の記録」は「八日め」で終わる。

八日め

がらんどうになった倉庫。歪んだ鉄格子の空に、きょうも外の空地に積みあげた死屍からの煙があがる。
柱の蔭から、ふと水筒をふる手があって、無数の眼だまがおびえて重なる暗い壁。K夫人も死んだ。
――収容者なし、死亡者誰々――
門前に貼り出された紙片に墨汁が乾き
むしりとられた蓮の花片が、敷石のうえにしろく散っている。

1913年竣工当時のままの煉瓦

哲学者の柿木伸之[vii]は、峠が書いたこの「八日め」が今も続き、「その建物を見る者を死者の苦難に向き合わせている」と指摘する。「赤煉瓦の『倉庫』を再生させるとは、戦争、核開発、植民地主義の歴史を他者とともに見返し、それに抗う生存の文化の拠点を広島に創ることにほかならない[viii]」のだと。

記憶は人にだけ許される特権ではない。残された「場」もまた確かに記憶している。

（敬称略）

註

i　峠三吉（一九一七～五三）に関しては拙稿「生きた墓標～峠三吉・怒りの文学」（「千里眼」一三九号所収）を参照のこと。

ii　峠三吉自筆原稿より書き起こしたため『原爆詩集』（一九五二年　青木書店刊）とは一部表記が異なる。女子学生の言葉のカギ括弧が一方だけなのは、自筆原稿を踏襲。

iii　「瀬戸内海文化博物館の構想」（ライブドアブログ「幻の文化施設」第十五回）参照。当時博物館構想を託された文化系シンクタンクの担当者の回想が掲載されている。著者名の記載はないが、シンクタンク「CDI」を経て武庫川女子大学教授となったM・S氏による記述であると推察される。

iv　弓狩匡純（一九五九～）ノンフィクション作家。著書に『国のうた』（文藝春秋社、二〇〇四年）『社歌』（文藝春秋社、二〇〇六年）ほか多数。

v　「弓狩匡純フェイスブック」内の【旧・広島陸軍被服支廠倉庫の再生問題をつらつら考えるの巻】（二〇一九年一二月二四日から断続的に連載）より。

vi　「2棟解体先送りの公算大　広島の被服支廠」（二〇二〇年一月二七日付中国新聞）

vii 柿木伸之（一九七〇〜）広島市立大学国際学部教授（ドイツ哲学）。著書に『ヴァルター・ベンヤミン〜闇を歩く批評』（岩波新書、二〇一九年）、『パット剝ギトッテシマッタ後の世界へ ――ヒロシマを想起する思考』（インパクト出版会、二〇一五年）ほか多数。

viii 柿木伸之「生存の文化の拠点としての『倉庫』の再生のために」
https://note.com/hiroshima_0806/n/n5fef66980bb5